
殺し屋

春奈

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺し屋

【Nコード】

N7202M

【作者名】

春奈

【あらすじ】

今の時代、マフィアがすべてを握っている。

マフィアは自分の手を汚さない。

その代わり手を汚すのは私たち殺し屋。

殺し屋は、依頼された殺しをすべて受け、報酬を貰う

殺し屋の掟は3つ

- 1、依頼を断らない事
- 2、依頼を途中で投げ出さない
- 3、感情を表に出してはいけない

破った場合は……

序章

私は今、暗くて狭い路地に居る。

なぜなら、依頼の殺しをもう一人の私がやっているから。

もう一人の私は血だらけだ。まっ自分のじゃないけど。

「終わった？」

「うん、終わったよ」

「またバラバラ？」

「面白いからね。みんなバラバラ、今度からそうしようか」

「良いんじゃない？ でも、処理する身にもなってよ。大変なんだから」

「そのままが良いじゃん」

「そうだけど！ 誰かが見ると厄介なんだよ」

「大丈夫だよ。どうせ私たち人殺してもいい人たちなんだから」

「そうだけど！ あんた嫌じゃないの！ これ見て警察に通報されてまた警察署行かなきゃいけないんだよ。そこらじゅうに指紋残すからこんな子供でもすぐに捕まる」

「別に私が行くわけじゃないし、簡単でしょ、それに楽しいじゃない。だって警察にへブラックカードを見て、驚かして帰る。その

時の警察の顔！ 見ものでしょうがない！」

「ふんっ！ あんたには苦勞が分からないわよ。顔見知りの警察官なら顔パスだけど新人とか違う警察署だといちいち面倒だし。一番苦勞したのは言葉も分からないし、ブラックカードの意味も知らない警察よ！ 信じられる？ 『死神』知らないのよ。そんな奴がいたら役に立たないじゃないっ！」

「そんな事私に言わないでよ。作った奴に言え！」

「で、作って奴誰よ！」

「知らないっ！ 疲れた寝る」

「逃げないでっ」

「……」

ホント自分勝手なんだから。

私は、血を拭かないで本部まで歩いていった。

今の時代、マフィアがすべてを握っている。

総理大臣もマフィアのボス。

そのせいで総理大臣はちよくちよく変わる、そのマフィアが壊れたかボスが暗殺されたかで。

ほんと、怖い世界だな

私の中には2つの魂がある。1つは私の、もう1つがさっきの子。

ああ、そうそう私の名前はジーラ・ノバ12歳。
さっきの子が、パラ・ノバ。

パラは、私の1歳上のお姉ちゃん。

私たちは二重人格じゃないただ私が禁忌を犯しただけ。パラの事は誰も知らない。

本部に着くと、入り口の受付で女の人が座っていた。

その人は新人なのかもしれない、私が入ると震えて今にも気絶しそうだった。

顔とか服についた血のせいかもしれないし、私の目つきのせいかもしれないし（私は昔から目つきが悪いといわれてるから）私達の評判からかもしれない。

それが全部。

その人から部屋のカードを貰って部屋に行った。

いつも散らかっている、明日家政婦に来てもらおうかな。

血がついたままベットに寝転がった。

それから5分もしない間にぐっすり眠った。

依頼

「ジーラ様！ ジーラ様！ いらっしゃいますか？」

ドアの外で従業員が私を呼んでいた。

すつごく居留守をしたかった、まだ寝てるから。

でも従業員が直接来るって事は大事な依頼の話だったから仕方なく起きた。

「何？」

ドアを開けながら言う。

「あ、あの依頼の話でして」まだ、昨日の服装だったので血がいっぱいこびりついてる。

「ふーん、中はいんな」

「はい」そして彼女をソファーに座らせて私も向かい側のソファーに座った。

「で、どんな話？」

「この方を殺せとのことです」従業員は封筒を出して言った。

その封筒の中の物は、今から私が殺す人の情報が載っている。

「この依頼人は誰？」

「レーソマフィアのボスです、しかも直々にここにいらっしゃいました」こんな子供にも敬語、よく出来てるよ。ホント。普通は反対なんだけどさ。

「ふーん分かった。もう行っていいよ」

「はい」彼女は軽く礼をして出て行った。

はあ、寝よ。

ベットに行くとシーツが血だらけで寝ようという気が一気に失せた。「しょうがない風呂でも入るか」風呂場に行き、お湯を入れた。このお風呂は大きい多分、人7人は普通に入れる。

服を脱いだ後、その服を見た、この服は意外とお気に入りであった。

色が黒だったので夜に殺しをする時は暗闇に隠れられて便利だったし、普段着ているととても安心できた。でも、これともお別れだ。本当に昨日は何てバカな事しちゃったんだろう、血を着いたこの服を脱がなかったから。多分今、洗濯しても血はこびりついたままだと思う。

お風呂から出るととてもさっぱりした。

着替えるとテーブルの上に置いてある封筒を取った。
中はアルボ・パトスという男の顔写真と情報だ。

茶色の髪に茶色の目、顔は丸い多分小太りなほうだ。
アルボ・パトス

性別 男

マフィア デイクス

家族 妻クレラ

子アレックス

他にもいっぱい書いてあるけどあんまり関係無い。
もう一枚の紙を見ると

依頼 アルボ・パトスを殺す事。

人目につかないように。

報酬 1500万

「はっ、しけてんな」 どうやらパラが起きたらしい。

「しょうがないよ」

「何がだ。2〜3ヶ月前は5億くらい貰えたら。違うボスだったけど」

「それは四天王の一人だったからだよ」

「そうだったのか？あんまり強くなかったけどな」

「あんた、骨折られたくせによく言えるね」あの依頼は、結構大変だった。久しぶりに自分の血を見たよ。

「どうせ、ジーラの中に居れば一日もしない間に治るから良いんだよ。それに、たまには怪我するのは良いものだよ。痛いけど」その後、パラは黙ってしまった。

それじゃあ一応説明しよう。

パラは魂なので、何故かは分からないけど、私の体がパラに支配されてる時は、いくら傷つこうと支配が解けると傷はあるが痛みは無いということが分かった。つまり、どちらかの魂が体を支配しているときは、支配している魂に痛みはあるが、支配が解けると魂がその体に受けた痛みごと持っていくという事、そして、その痛みは一日ちよつとで治るという事。

四天王つてのは殺し屋で一番強い人たちの事。

私達は今までに2人殺した。そして、一人目を殺した時、私も自動的に四天王になってしまった。なりたくないのに。でも、まだもう1人決まっていけないので、今は3人しか四天王が居ない。

しかも、そのせいで会議が立て続けにある。まあ私達のせいだけど。それがとつてもめんどくさい。

はあ、それじゃ用意でもするか。

買い物

今、私は武器屋にいる。

今回は指定されてないし、銃でいつか。

「銃でいいよね。パラ」

「なーに言ってるんだよ。今回はお前がやるか？」

「いや、うちはどうちでもいいけど？」

「それだったらオレがやる」

「そう。でも、なんか不満でもあるの？ あんたなら何でも殺せるじゃない」

「お前もだろ。いや今日は銃って気分じゃない」この気分やめ。

「じゃあどういう気分なの？」

「小刀」

「そんなん？まあいいけど」

「おじさーん小刀」

「小刀あゝそんなんでもいいのか？」すごく低い声で、不思議そうに聞いて来た。

「いいんだよ。今日はこういう気分なんだ」

「そうか。じゃあ一万」

「へいへい」私は財布から一万円札を出した。

このおじさんには陽気に振舞ってないと、あの低い声で心配してくる。この人は図体はでかいが意外に気弱なところがある。

普通の武器屋は路地の奥とかにあって、合言葉がある。それに壊れやすい物をすごい高さと売りつけてくる。

それに比べてここは気楽に来てとても良い物を安く売ってくれる。でも、たいていの人はここに来ないだって

武器屋を出た後、服屋に行った、服を買いに。と言ってもおしゃれ用の服じゃない、さっきの服の変わりになるのを探しに。

出来るだけ真っ黒のやつが良い。

服を見てると店員が話しかけてきた。

「何かお探ですか？」

「出来るだけ真っ黒な上に着るのが欲しいの」

「真っ黒ですか。ちょっとお待ちください」

待つてると店員がフリルの付いたミニスカートを持ってきた。上に着るものと言ったのに。でも、私好みだったので買う事にした。

その後も店員は黒っぽいのを持ってきたけど、どれもなぜかズボンやスカートばかりだった。何でなの？ 私、上に着るものっていいのに。

その後、うつとうしくなつて一人でちよつと見てますと言って離れた。

一人になつてよかった、自分好みの服が見つかった。

その後、会計を済ませるためにレジに行き、クレジットカードを出した後ろの名前を見て店員は硬直した、でもその名前の人は皆、大人だと思つてるのですぐに

「すみません。身元の証明を出してもらえますか？」

という事になる。

はあため息をついてから、ブラックカードを差し出す、そうするとまた店員が硬直する。

それをパラは笑っていた。

「ははははは。この顔笑える」確かに笑えた。顔が引きつっていて変な顔になつてる。

服屋を出て、すぐに私は腹を抱えて笑った。

その後、笑いが治まると本部に帰ろうとした時花屋があつた。

花屋を通りかかった時、パラが話しかけてきた。

「ジーラ、いいのか？」

「何が？」

「花買わなくて」何で花を買わなくちゃいけないんだ？ なんかあつたっけ。

「何で？」

「だって……その……明日は……」おかしい。パラがこういう話の方をするのは、何か私のことを心配してるときくらいだ。何を心配してんだろ。

「じれったいなあ。早く話して」ちょっとイライラしてきた。

「明日は……あいつの命日だろ？」

「ハ……ハハ。もうそんなにたったの？」

「ああ」すばやく答えた。

「早いね。一年って」

「ああ、そうだな」

「ハハハハハ……」気が付けば私は泣いていた。

「大丈夫か？」

「大丈夫よ」涙を拭きながら答えた。

「……花は買うか？」

「うっん買わない。明日買っ、あの子の大好きな百合を」

「そうか。分かった」

情報屋〜1〜

「パラ、どうする？ もう殺^やりに行く？」

私はやる気のない声で聞く。

「ああ、明日はあいつの命日だからな。この日は殺しはしないって決めたろ」まさか憶えてたとは、いつもすぐ忘れるいい頭なのに。

「そうだね。じゃあ殺^やりに行くか」

「今、どこに居るんだ？」

「分らない。情報屋にでも聞こう」

「えー。じゃあ、あいつんどこ行^いくって事？」

いかにも嫌だからうんって言うなよって言う感じの声だ。

「そうだけど？」

でも、私にはそんな事関係ない。だから即座に答えた

「オレあいつの事嫌いなんだけど、しかもバカ高いし！」

時々、ジークは自分のことを「オレ」と言ったり「私」と言ったりとコロコロと変える。

「しょうがないよ。あいつは情報屋一優秀で情報屋一高慢なんだから。でも、あいつの情報には確かなんだからしょうがないでしょ」

「はあゝ嫌だなあゝ嫌だなあゝ」ぶつくさと文句を言い始めた。文句を言わせるとすぐにこうなる。

「じゃあ、いいよ。行かない」

「本当！？ やったね」パラの声がパツと明るくなった。

「その代わり探してね」

「ええゝめんどい」

「じゃ行くよ」

「へいへい。仕方ないな」

情報屋と言うのはいわゆるスパイのようなもの。

1つのマフィアに最低50人ほどいる。

でも、この事はマフィア達には秘密で、知っているのは殺し屋ぐらいなのだ。だからこの事を口外したものは殺され、これを知ったものも殺される。

情報屋はすごく汚い。絶対に何年も掃除をしてない。

中に入らなくても遠くから汚いのがよく分かる。ちゃんと見ないとただの廃屋だ。

で、唯一綺麗なのは紫色のカーテンに金色の刺繍で「情報屋」と書いてある所だけだ。

受付のところに着くと受付人の女が、合言葉は？、と聞いてきた。そんなもんあったかな？ 今まで無かったのに……

「バカだな。あるわけ無いだろ。何悩んでんだ。早く開けろって言えよ」イライラした声で言ってた。こんな事でイライラするか普通。「イライラすんな、パラ。早く済ませるから」パラを落ち着かせた後、受付人に

「合言葉？ そんなもん知らねえよ。早く開けろ！！」

と不良が言うように言った。

すると受付人が怯えきった声で、分かりました、と返事をし後ろの扉を開けた。

「ありがとねっ」私は意地悪く笑う。

その扉の何キロか歩いた向こうには、また受付人がいる。

最初のほうは本部のほうの人間でこっちは、情報屋の人間だ。歩いてる途中にパラが話しかけてきた。

「思ったんだけどさ。いつもおれ以外の奴にはそういう態度だよな。どうしてだ？」

「別にお前以外じゃないよ。まあ何でかって言ったら……」

少し考えてから言った。

「みんながあの人みたいに怖くて近寄らないでしょ」

「はっそんな事か。でも、そんな事しなくても大丈夫だよ。殺し屋って事とお前の名前を言えば一瞬でああなる」

「まっそうだね。でも、いまさらこれは変えられないよ。急に変わる弱く見えるでしょ」

「ああジーラの言う通りだ」

受付のところに着くと、受付人が、誰を呼ぶ？、と聞いてきた。

今日の声は低い声だ。男か？マントで顔を隠していて分からないな。

「ビノを呼べ」

「ビノかちょうど今、誰も聞いてない。料金は5000万だ」

「そうか。カードでいいか？」

「ああ。じゃあ今呼んでくるからな！」

情報屋く2

私は今、薄暗い個室でビノを待っている。手続きをしてから五分たったのにまだ来ない。

パラはもうイライラして今にも体を乗っ取りそうだ。

「なあ、もう帰ろうぜ！ あいつ来ないじゃん」

「待ってるよ。多分もう少しで来るよ」

「だいたいかな」

パラが言った瞬間、向側のドアが開き、小さい赤毛の男の子がゆっくりと入ってきた。ビノだ。

ビノは私の2歳下。でも、私よりもこの世界に早く入った。

「ああ何だ。まだ居たの。君の事だからもう帰ってると思った」知っていたのに謝ろうとしない。これがパラにはガマンならない。まっ私もだけど。

「知ってたのに待たせてたのか？」

「そうだよ」悪いかとでも言うような口ぶりだ。

「お前って奴は、本当に殺してやりたいよ」

「どーせ殺せねえーだろ」バカにしたような顔だ。

「だからなんだよ。忘れたか？ オレは四天王だ。殺しの法律なんてものは変えられるんだよ」

「ハハハハハハ。そういや、そうだったね。で、用件は？」

「アルボがどこに居るか」

「ああ、あのマヌケのアルボか。依頼主は？」

「レーソだ」

「レーソか。でも何でだろうな」ほんとに不思議らしい。殺す奴の事を考えた事は一度も無い、多分これから無い。

「アルボは使えないのにな。ほっとけばいいのに。おかしいな」ビノは、一人でぶつくさとしゃべってる。

「お前はと思う？ ジーラ」

「知るか」私はそうはき捨てた。

「お前は気にならないのか？」

不思議そうに聞いてくる。

「ならない。オレは依頼されたら殺すだけだ」

「はっお前は犬か」

「何だと！」

「おお怖い怖い」バカにしたような口ぶりで、手を振っている。

すると、このバカにしたような口ぶりが原因なのか、殺しをする時のように、パラが体を乗っ取り、ビノの胸ぐらを掴み怒鳴った。

「てめえ。俺達の事、バカにしてんじゃねーぞ。お前何か俺達に掛ければ直ぐにあの世に逝かせられんだ。法律なんか簡単に変えられんだよ。それなのにお前を殺さない、俺達に感謝しやがれ！」

満足したのかパラは手を胸ぐらから放し、体を私に返した。

ビノを見ると隅でうずくまり泣いていた。

「あいつもやつぱりガキだな」満足したように言っている。

「お前泣かすなよ。アルボの居場所聞くのに、どんだけ掛からせるんだよ。部屋出てから1時間近くたってるんだけど」

「じゃあ8時か。ヤバイな。早く聞き出せ！」

自分が泣かせたのに、後は私かい。ほんとむしがよすぎる。

この場合、どうしたらいいか、全然分からない。多分私は今、究極の選択に出くわしている。

一つ目が、優しくして謝り、居場所を聞く。

二つ目が、泣いてるところに、脅しをかけ、居場所を言わせる。

多分、パラだったら2つ目を使うと思うけど、それはさすがに私には無理だ。かといって一つ目のを使うと、弱く見えて嫌だ。

悩んでいるうちに、吹っ切れたのかビノが、

「ジーラ。ごめん。ちよつと図に乗りすぎたかもしれない。アルボは、今……」ビノは何かを取りに個室から出て直ぐに帰ってきた。

「家に帰る途中だ。アルボの家、分かる？」

涙目で私を見上げて聞いてくる。今までビノがかわいい、と思った

事は無いけど、これはかわいい。

「知らないよ」

「だよ。これ貸してあげるから早く行きな。ちゃんと返してね」

「分かった。ありがとう」

アルボ・パトス

ビノが貸してくれた発信機では、アルボは今、この町で一番長いとされる橋のど真ん中に居る。車が走ってるはずなのにど真ん中。車なのか？

その橋に着くと、車は一台も無かった。

30代位の小太りな男が、何故か橋のど真ん中で立っていて、こっちを見ていた。アルボだ。

「お前、殺し屋だろ？ 私は殺されるんだろ？」急に話し掛けてきたので、驚いた。だけど、それ以上に自分が殺される事を、知ってる事に驚いた。

「ああ、そうだけど。何で知ってる？」

「分からない。だが、何故か朝起きた時、今日死ぬ、と感じたんだ」悲しそうに微笑み、また話し始めた。

「それに、君の殺気が痛いほど伝わったんだ。朝のが無くて、その殺気が私に向けられてると分かったら、もう死ぬんだって誰でも思うよ」また、アルボは悲しそうに微笑んだ。

それにしても、パラはいつから殺気を出してたんだ？

いつも殺しになると、殺気を出して人を近づけないようにする。まあ、誰でもすると思うけど。パラは、遊び半分の殺気だ。まだ、本気なんて出さない。

「なあ、アルボ。逃げないのか？」

「逃げたいよ。君の殺気で、そこらじゅうが痛い。でもね、今、逃げたら殺されるだろ？」声がとても穏やかだ。まるで、助かるから大丈夫さ、とでも言いたそうな声だ。

「ああ、そうだな。でも逃げなくても殺すけどな」

「なあ、お願いがあるんだ。明日まで待ってくれないか？」

「何故だ？」私は眉を上げて、聞いた。

「明日は、私の息子の誕生日だ。ここにあるプレゼントを自分の手

で渡してやりたいんだ」ポケットに入れていた手を出し、小さな箱を見せて来た。あれだけ小さいんだ。多分、ミニカーだ。

「そうか。でも、それは無理だ。明日は誰も殺さないと決めた日だな。それに知ってるだろ。殺し屋の掟を殺す相手に感情を見せてはいけない、って」

「で、でも、私は何もしてないのに、殺されるんだぞ。慈悲は無いのか？」声が乱れてきてる。顔がゆがんでる。きつと、理不尽だと思っただろう。

私達が殺してきたほとんどの人が、この顔を死ぬ前にする。見飽きた顔だ。

「ない。さっき言っただろ？ 殺す相手に感情を見せてはいけないんだ」

「でも、私は何もしてないんだ。私はただ見てしまったただけなんだ」頭を抱えながら、うずくまって独り言のように叫んでる。何を言ってるんだ？ 私の眉が知らぬ間に上がってる。不思議に思った時とかはよくやる癖だ。

「私は見てしまった。ただそれだけだ。あんなおぞましいものの二度と見たくない」

「何を見たんだ？」

「レーソの実験だよ。あれはおぞましかった。レーソには気を付けろ！ レーソは何か分からないような事をやっている」

「おかしいなことを言うな。レーソが危険だと！ あれはただの弱小マフィアだ！」

そう、レーソは弱小マフィアだ。レーソはあまり知られていなくて、権力も弱い。だから総理大臣にもそこから出た事はない。

「そうだ。弱小だ。だからこそ、上り詰めようと、必死でもがいているんだ。私は見てしまったただけだ。お願いだ。殺さないでくれ！

まだ、死にたくない。あんなもの見ただけで、殺されるなんて。しかも、こんな子供に！」

今まで思っていた事を、全部言ったらしい。

でも、そんなの関係ない。私は殺すだけなんだから。

「俺には関係ない、そんな事。俺はお前を殺す。今」

「うわああああああ」アルボが背を向け、逃げ出した。パラの遊び半分の殺気が、本物の殺気変わったんだ。

「パラ、交代だ。殺していいよ」

「はいよ」待ってました、とでも言うような口調で答えると、すぐさま、さっきのビノの時のように体を乗っ取った。

「ハハハ」笑いながら、アルボの所まで普通の人の目では見えない速さで走り、アルボの目の前でまた、バカにしたようにハハつと笑うと、小刀^{こがたな}を出して胸に刺した。そこからは、勢いよく血が噴出し^{ふきだ}、パラは血を浴びた。

「ぐはっ」そう、うめき声を上げると、口からも血を出し、倒れた。「ああゝあつけないなゝ。すぐ死にやがって。もつと楽しませろよ、お前の死は美味しくないな」そう言つと、パラは死体を蹴った。すると、ポケットに入っていた箱が出てきた。パラは、それを拾うと、話し掛けてきた。

「なあ、これどうする？」

「私が処理しとくよ」

「そうか。じゃあ俺は寝る」疲れたのか、いろいろと。

「わかった」

私は橋を渡り、アルボの家を探す。

人っ子一人いない、これじゃアルボの家が聞けない。まあこの格好じゃ聞いても無駄だけど。

どうしよっかなゝ。まっ、地道に探すか。

それから、10分。

あった、アルボの家だ。まだ明かりがついてる、他の所は付いてないってのに。

「パパ。早く帰ってこないかなゝ」男の子の声。アルボの子供アレックスだ。

「今日は仕事が遅いのよ。アレックス早く寝なさい」あれは妻のク

レラか。美人だ、アルボとは吊りあわないな。

「嫌だよ。今日あった話すんだ」眠たそうな声だ。

「明日でいいでしょ」声が優しい、ちよつと母さんに似てるな。

「今日がいいの」

「じゃあ、後5分だけ待っててもいいわ。でも、5分たったら寝なさい」

「うん。5分ね」ニコツと笑顔で答える。

アレックスいい子だな。まるであの子みたい。

「ジーラ。あの子、あいつみたいだな」急に寝ているはずのパラが話し掛けてきた。

「パラ！ 寝るんじゃないの？」

「寝れなかったんだよ！」絶対寝る気無かったよ、こいつ。

「それより、あの子似てるな」

「うん。そうだよ」

「プレゼントはどうするんだ？」

「あの子に渡すよ」

「その格好でか？」

うそだろ、とでも言いたいような口調だ。

「違う。手渡しじゃない！」

「ふん。まあいいけどさ。早く終らせろよ」

「分かってる。パラ、あんたは寝てな」居たらこれからやることを茶化されそうだ。

「言われなくても寝るよ」

もうすぐで、8時半になる。それに、アレックスの寝る時間が近づいている。

アルボの家のベルを鳴らした。

「パパだ」アレックスの元気な声が聞こえる。

アレックスがドアを勢いよく開けた。

「パパ？」

そこには、アルボじゃなく、アルボが買ったアレックスのプレゼン

トが置いてある。私が置いた、この格好じゃ、明日くらいにアルボの死体が見つかる時、最初に疑われて家族の恨みを買う事になる。そうすると、ちよつと厄介なんだよな
じゃ、帰るか。

最悪の手紙

本部に帰ると、テーブルに1つの手紙が置いてあった。

これは殺し屋、全員に配られてるはずだ。じゃなきゃおかしい。この封筒の切手は、本部の社長とも言えるマキノビ・ハイドしか持っていない、切手だから。

こいつが手紙や何かを送ってくれる時は、必ず、私が不幸になるものだ。私はこいつが嫌いだ。ついでに、パラも。

「最悪だ」そう思いながら手紙を開けた。

ジーラ・ノバへ

明日、あと一人の四天王を決めるための試合をする。

殺し屋全員が来なくてはいけない。もちろん、お前もだ、ジーラ。お前には、戦ってもらうからな。

場所は、訓練場。

時間は、10時だ。

もし遅れても来るんだ、絶対に。

マキノビ・ハイド

「あのヤロー。明日が命日だと知ってるくせに！」

私は叫ぶと、壁を思いつきり叩いた。すると、そこに大きな穴が出来た。それから、いっぱい壁を殴り、穴を増やした。

「おい！ ジーラ！ やめろっ！」

パラの声がする。叫んでる。

「何やってんだ。らしくないぞ、こういうのは俺がやるもんだ！」

これを聞いたら絶対にパラだってこうなるはずだ。だけど違った。「しょうがないさ。あいつは……」続きを探してるように黙り込むと答えを見つけたのか口を開いた。

「……俺たちを試してるんだ。俺たちが、どれだけ強くなれるか」
パラはまるで、とても割れやすい物に触ってるかのように、言葉を慎重に選び、話している。その訳は分かっている。こんな話、私達には禁句のようなものだったからだ。

「だからあの子を殺させた。俺たちの弟を。多分、邪魔だったんだ。わかってただろ？」

悲しい声だ。でも、泣いてない。パラはあの時だって泣かなかった、私達の弟を殺したとき。

「分かってたよ。あいつにはあの子が邪魔なんだって。でも、パラ。邪魔だったから……人って殺していいの？ 違うでしょ？」

こんな事、私達は思っちゃいけない。邪魔だからって依頼されて殺してる、私達が思っちゃいけないことなのに。

「なあ、ジーラ。そんな事分かってるだろ？ 答えなんて知ってるだろ？ 俺たちが思っちゃいけないことだよ、それは」パラも同じ答えか。でも、もし、同じ答えじゃなかったら私は、怒ってただろうな。

「うん。分かってるし、知ってる」

「そうか。そんじゃーこの部屋、変えるか、修理してもらえ。俺はこんな部屋住みたくないからな！」

さっきの暗い空気が一気に明るくなった。パラ、子供の時から変わらないな、良かった。

絶体絶命

昨日パラと話し合った結果。

人は殺さない、と決めた。手紙には戦ってもらうと書いてあったが、殺し合いに決まってる。

でも、殺さないとするとどうするかは分からない、その時のルールでパラが決める。きつと気絶させるか、降参させるかのどちらかだろうが。

よし、そろそろ行くか。すると、外に出たとたん他の殺し屋達が私を囲った多分、新入りだ。まあ、こうなる事はなから分かってたけど、こんなにいるとはビックリ、せいぜい10人だと思ってたのにこりゃ、倍はいるな。どうしようかな？

「何のようだ、新入りが！」一応、睨んでおく。去年はこれで一人逃げたな、確か。

「はっ四天王のジーラがこんな小娘だったとはな。恐れるまでも無いじゃないか、何でもみんなこいつの事を恐れているんだ？」

一番近くにいた肌の黒男が他の奴らに大声で言うと言を上げて笑った、他の奴らも同じように笑う。

「ああ、命知らず達め。集まるのが遅いと思つたら、今年も恒例のあれか、新入りのほとんどがなぜか通る道だな。どうしてこうも皆同じ思考なのかね？」

顔姿見えないがこのねたねたした様なしゃべり方は、あいつしかないマキノビ・ハイド。

すると、肌黒い男が私の鼻に着くほど指を近づけ言った。

「社長さん、何でもこんな餓鬼が四天王なんだよ。ほんとにこいつ、依頼ちゃんとこなしてるのか？」

「この世界には、年齢なんか関係ない。たとえそいつみたいに12歳のクソ餓鬼だろうがね、依頼さえちゃんとこなせるんだつたら誰でも雇うさ」さりげなく私の事馬鹿にしゃがって、ホントむかつく。

「おい、通らせてもらうぞ。俺は早く終らせたいんだ」

「生意気な口利きやがって、殺してやるぞ！」

後ろでアハハと笑い声が聞こえた。

「君たちやってみたえ。こいつを殺した奴は特別、四天王にしてやるう」これを聞いた男共は声を上げた。なんてこと言ってんだあいつ。はあ、しょうがないな。

「パラ、起きろ。おい、おきろつてば」ダメだ、起きない。私がやんなきゃダメなのか。私だと力加減できなくて、誰か殺しちゃう。もう一度、パラに呼びかけた。だけど、反応が無い。そうこうしている内に男が1人、ナイフを振りかざした。隙がありすぎたので、強く腹を殴った、すると、10m先くらいの壁まで吹っ飛び、気絶した。どうやら、一対一^{サシ}でやることにしたらしい、これだったら、私でもやれる。でも、パラのほうが上手なのは変わらない、一人一人、気絶させながらパラを呼び続けた。

半分くらい居なくなつたところで、皆気付いたらしい、一人じや私に勝てないと。だから、一斉に10人くらいの束で向かってきた。もうこれはヤバイ、パラを本気で呼ばないと、約束を破る事になる。

「パラ！！ 起きてるでしょ。来ないと、契約もあの時の約束も、全部破るから」これをいって良かったかな？ 少し後悔のようなものがよぎった時、目の前の人々が私に襲い掛かろうとした形で止まっている。これは絶対にパラのせいだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7202m/>

殺し屋

2011年10月7日02時37分発行